

臨終儀礼と死後の世界観

趙恩鶴

The Deathbed Ritual and the Concept of the World After Death

Eun Ae CHO

①臨終儀礼について

②中冓と「見る」

③死のイメージ～秋～

④おわりに

【語彙解説】

人の死に関わる儀礼には、葬送儀礼や追善供養などがあるが、それらに先立ち、人の死の際に行われて、死への恐怖を和らげる儀礼としては「臨終行儀」がある。これは、死んでいく人と見送る人の両者に関わるもので、死んでいく者にとっては、「生」への執着を捨て、「死」をどのように迎えるかにかかる儀礼である。また、死者を見送る周囲の人にも同じく、「亡くなる人への執着を捨てることを求める儀礼として定着していた。『往生要集』による、臨終行儀や臨終の一念がいかに重要であり、また後世への影響が大きいかを考察し、さらにその場面を語る記述の有無がどのように物語文学の中で機能しているかを見てくることは、日本文学における儀礼のあり方を考察する出発点となる。

また、人が亡くなつた後、次の生を受けるまでの過程として定義されるのが「中冓」である。しかし、説話においては、死後ではなく臨終の際にすでに、中冓を経験し、死後のその人のあり方を「見る」という視覚的表現でなされる事例がある。死者が中冓にいる四十九日の間、亡くなつた人のために追善供養をして功德を回向し、往生を

願うのが四十九日の法事であるが、実は、臨終儀礼からすでにその作法は始まっていると考えられる。また、地獄巡り譚で、死後の世界を語るためにその死人が生き返ることが、中冓における時間と合致する七日間である」と、他方、謡曲においては、死者の迷う空間的概念が、生と死の境の時空間として機能しているものがある。

さらに、「死」のイメージは「秋」に連想付けられるようになる。和歌の世界で、秋の歌語にみられる「紅葉」、「雁」が死を連想させることや、『和漢朗詠集』にみえる「西方」と「秋」のつながりは、「秋」と「西」が「死」のイメージに結びついたことを示している。文学が典拠からの引用を繰り返しつつ再編成されていく過程で、「秋」という季節にまつわる連想が移り変わり、寂しさの念が加わって、死の無常観が際立つていくことになつたのは特徴的である。本来の典拠にはみえない、無常観の連想をともなつた「秋」のイメージは、日本文学における死の儀礼としてとらえることができるものである。